

デフバスケットに出会い、人生観が変わりました

大学入学と同時に上京し、デフバスケットボールのチームに加入した山田洋貴さん。この出会いが、彼の人生観を大きく変える転機となりました。



山田 洋貴(やまだ ひろき)

Hiroki Yamada

1989年福島県生まれ、東京都在住

三菱重工業株式会社勤務

デフバスケットボールチーム「scratch」^{スクラッチ}創設者(代表)

—出場を目指しているデフリンピックの競技種目を教えてください。

デフバスケットボールです。

—バスケットボールをはじめたきっかけはなんですか。

中学生のときです。小学生までは野球をやっていたのですが、中学に入学したとき、幼なじみがバスケットボール部に入るというので、一緒に入部しました。

なんとなく、バスケットボールをはじめましたが、やりはじめたらはまってしまい、今まで続いている状況です。

高校生まで聞こえるチームでプレーし、デフバスケットは大学生になってから始めました。

聞こえるチームでは声でコミュニケーションを取っていましたが、僕の場合、どうしてもズレが生じてしまい、何を言っているのか分からないことがありましたし、練習内容も理解できないことがありました。そのため、見て判断することが多かったです。

デフバスケットを始めたときに感じたギャップは、聞こえるチームでは声でコミュニケーションを取っていたのに対し、デフバスケットでは手話がコミュニケーション手段だったことです。手話が分からず、コミュニケーションが取れなくて、ショックでした。そこから手話を覚え、コミュニケーションが取れるようになると、デフバスケットがとても面白くなりました。



—デフバスケットボールならではの特征やルールはありますか。また、魅力とか見どころありましたら教えてください。

特徴は、「みる」情報が多いところです。例えば、審判が旗を振ったり、試合終了を知らせるゴールのライトが点灯するなど、「情報保障」(※)がとても重要になります。

また、声ではなく、身振りや手話、アイコンタクトでコミュニケーションを取りながらプレーすることも魅力の一つです。

デフバスケットでは手話でのコミュニケーションが当たり前で、やりとりがスムーズで、これまでの楽しみ方とは違う新たな発見がありました。それがとても心地よく、楽しくプレーできる要因となっています。これがきっかけで、人生観が大きく変わりました。

(※) 障がい者への情報提供の方法のこと。聴覚障がい者にとっては、手話や指さしボード等が情報保障ツールとなる。



インタビューの合間には、越前選手（右）と仲良く談笑😊

—デフリンピックを目指すきっかけになったことを教えてください。

大学のあるときにデフバスケットのチームに入りましたが、たまたまメンバー全員が日本代表選手でした。そのとき、自分も日本代表になりたいと強く思い、メンバーの背中を追いかけて、6年ほどかかりまし

たが、2014年に日本代表になることができました。

デフリンピックを知ったのも、デフリンピックを目指そうと思ったのも、このときです。

デフバスケット自体は中学生のときに知りました。母がバスケットの雑誌でデフバスケットの記事を見つけて教えてくれました。大学に入学したとき、ふと「デフバスケット」を思い出し、デフバスケットのチームがあることを知り、連絡してチームに入りました。



—あなたにとって、デフリンピックとは何ですか。

デフリンピックは、きこえない・きこえにくい人にとって最高峰のスポーツ大会であり、まさに夢の舞台です。多くの選手が憧れ、目指す場所です。

—競技をする上で、ここが難しいとか、苦労していると感じる点がありますか。

デフバスケットは「みる」ことが大事なので、みてほしいところでももらえないところが難しいです。試合中、自分もですが、チームメイ

トからみてほしいときにみてもらえないことが多いので、自分をみてほしいときは、みてもらえるよう工夫しながら視界に入る様にアピールしています。

ー東京 2025 デフリンピックは、初回の大会から 100 周年を迎えるとともに、国内で初開催となる記念すべき大会となります。さらに、サッカー競技が福島県で開催されることになりましたが、このことについて思いを聞かせてください。

デフリンピックの日本開催に驚きましたが、福島でサッカーが行われることには、もっと驚きました。

福島の方たちに、デフリンピックやデフスポーツを知ってもらい、デフリンピックを応援して盛り上げてほしいです。



ーデフバスケットボールチーム「scratch」を設立した背景を教えてください。

新型コロナが流行した際、いくつかのデフバスケットボールチームが解散したり、メンバーが離れたりする事態が起こり、「何とかしなければ」と感じるようになりました。そこで、デフバスケットボールで世界の舞台を目指すメンバーが本気で技術を磨くため東京に集まって練習をしていたので、そのメンバーで「scratch」を立ち上げました。自分たちのプレーを見て、子どもたちが目指す存在になればと思っています。また、この取り組みがきっかけとなり、東北や日本全国にもデフバスケのチームが広がることを願っています。



R7.2.1 福島県のデフリンピック 300 日前イベントに出場した「scratch」の皆さん

手話で scratch ポーズ👏

ー福島県出身のデフバスケットボール選手の越前由喜さんとの出会いはいつですか。

2012 年で、僕が大学 4 年生で、ゆうき（越前選手）が中学 2 年生のときでした。

(隣にいた越前選手が会話に入ってきて、出会いのエピソードを教えてくださいました)

(山田選手が) いきなり、名乗るより先に「福島出身だよ。僕も福島なんだよ」と声をかけられました (笑)。そこからのつきあいです。

—プライベートな質問に入ります。

休日はどのように過ごされていますか。

休日はスマホを片手に、人気のアプリゲームをしながら歩き回っています。夢中になって、5～6時間歩き回ることもあります。



アプリゲームに夢中の山田選手

—山田選手の Instagram に、とても美味しそうなお料理が載せてありますが、奥様が作ったのですか？

そうです。美味しくて、つい、食べ過ぎてしまっています (笑)。

(越前選手から)

東京に練習に行ったときは彼の家泊めてもらうのですが、毎回、ご飯をごちそうになるのですが、すごく美味しいです。

—奥様のお料理で特に好きものは何ですか？

サバの竜田揚げ！大好きで、試合前とかにリクエストすることもあります。

(奥様に質問)

—奥様の得意なお料理は何ですか？

パスタ系が得意です。あまり失敗しないので(笑)。



山田選手の奥様の手料理 とても美味しそう！

—最後に、応援してくれるみなさんへメッセージをお願いします。

東京 2025 デフリンピックを多くの人に知っていただき、みなさんに応援を力にして、メダルが取れるようがんばります。

応援、よろしくお願いします！

